



教育学部

准教授 雙田 珠己さん

Souda Tamami

●プロフィール

1980年 埼玉大学教育学部を卒業後、商品科学研究所入社
 2000年 東京学芸大学大学院修士課程入学
 2005年 博士号取得
 2007年 熊本大学教育学部准教授

障害者の願いをかなえるために。

衣料品の商品開発を手掛ける

雙田さんは1980年から19年間、セゾングループが出資する民間研究所に勤めました。当時は、大学に残ろうとは全く思わなかったといいます。学生時代に被服材料学を学び、商品科学研究所では、退職衣料（タンスの肥やし）、ローティーン衣料などを研究し、衣料品の商品開発を手掛けました。時代はちょうどバブルの頃で景気がよく、ふんだんに研究費が使える夢のような日々でした。「周囲の人たちも有能で自由で、実に刺激的な日々でしたね」と、雙田さん。初代所長が三枝佐枝子さんと、「女性を大切にしてくれる会社でした」。しかし、バブルがはじけ、1973年から続いた研究所も1998年にセゾン総合研究所に合併。その後、大学院で学び、2007年に熊本大学に赴任されました。雙田さんは単身赴任で、ご主人と大学生と高校生の二人のお子さんは東京で暮らしています。

障害者の衣生活をテーマに研究

繊維が好きだという雙田さん。「顕微鏡で見た繊維の世界があまりに美しかったですよ」。しかし大学では繊維学（物質としての繊維）ではなく、繊維の消費性能（洋服など、身につけるものとしての繊維について）を学びました。研究所では万人を対象とした機能性の追及を目指してきたわけですが、大学院入学に際し、当時はできなかったマイナーな人たちに目を向けようと思いました。そして「運動機能に障害がある人の衣生活」をテーマに決めて、修士から博士まで同じテーマで研究を続けます。

「たくさんの方が関わってくれて、この研究は形になっていくんですよ」と、雙田さん。中でも、雙田さんは子どもたちに目を向けます。肢体不自由特別支援学校へ通い、「どうやったら着やすくして負担の少ない服を作ることができるか」ということを考え、実際に心拍や身体の動きを数値化して快適度を測ることをしました。また、どんなに障害が重くても生活者として自立するように、介護者を含めての衣生活教育をしてきました。

障害者の自立のために

障害のある子どもたちに、どんな服が着たいかを尋ねると、必ず「みんなと同じ服が着たい」という答えが返ってくるそうです。障害の有無に関係なく「何が欲しいのか、何が着たいか」がわかることは、生活者として自立するうえでとても大切な感覚です。自分で着られないから、介護者に着せられるがままの毎日を過ごさざるを得ないから、「こんな服が着たい」「こんな風に着たい」といった欲求を言えなくなるそうです。そんな欲求を持つことに罪悪感を感じたり、欲求があることを忘れてしまうという現実があります。ですから、子どもたちだけではなく、親など、周囲の大人たちを含めた衣生活教育が必要なのだそうです。「研究所時代には、モニターや被験者を人の感覚を測定する機器のようにとらえていた気がします。けれども、現在は、障害がある方の多くが、ご自身の衣生活を改善したいと強く願って協力してくださるせいか、人同士のつながりの中から私の方がパワーをもらっていると感じます」。ですから、研究を続けるうえで「決してひとりではない」というふうに思える。それが雙田さんに勇気を与え、熱く動かし続けるのです。



特別支援学校でのアクティビティ